

(英語版)

(アラビア語版)

(目次)

(SF小説) ナクバの東 (十六)

第一部「イスラエル、イラン核施設を空爆す」(十三)

第四章 三羽の小鳥(一)「エリート」(一一三)



未明に基地を飛び立ったイスラエル空軍のF35ステルス戦闘機三機はアラビア半島の付け根を横断し、サウジアラビアとイラクの国境線上空を飛行しつつあった。東の空が白み眼下のネゲブ砂漠に陽光がさし始めた。砂漠の起伏が波のような影を作り、その影と赤茶けた砂礫が黒と赤の絶妙なコントラストを描いている。何万年いや何百万年昔からの変わらぬ光景だ。ヨーロッパとドバイを結ぶ民間定期便のパイロットにとっては見慣れた風景であるが、今回のミッションに赴く若きパイロットは感動的な面持ちで眼下の風景を眺めていた。雲ひとつない真青な空と乾燥し切った砂漠の狭間を三羽の小鳥たちはひたすら東に向かって飛行を続けた。

イスラエル空軍選り抜きの三人。彼らは肌の色も父祖の出身地も、さらにパイロットになるまでの経緯も対照的と言えるほどに異なっている。それでも彼らは「祖国イスラエル」を守ると言う気持ちで誰よりも強く固い絆で結ばれていた。彼らはお互いをニックネームで呼び合っている。三人のリーダー役で雁行飛行の先頭を飛ぶのは「エリート」。右翼後方の二番手が「マフィア」。そして左翼後方三番手のパイロットが「アブダラー」である。

(続々)

荒葉一也

(From an ordinary citizen in the cloud)